

吹田市立博物館

博物館だより

NO.14

SUITA CITY MUSEUM



農耕蒔絵杯

平成12年度 特別展

「農耕の風景―摂津の四季耕作図―」

平成12年4月15日(土)～6月18日(日)

今回の展示は摂津地域の、特に民間に残されてきた四季耕作図を集めています。四季耕作図は1年間の稲作の過程を四季のうつろいの中に描いたもので、屏風、襖絵の他にも絵馬や漆器、織物等の工芸品の意匠にも採用されています。特に江戸中期以降数多く描かれ、全国に作品が残されています。

日本では、すでに平安時代から大和絵の画題である四季絵、月次絵に田植えや稲刈りなどの場面が四季の風物詩として個々に描かれてきた伝統があり、室町時代に中国から稲作と養蚕の各工程を描いた耕織図が伝わると、こうした伝統と結びつき四季耕作図は生まれました。

中国の耕織図は、皇帝が民の農耕、養蚕の労苦を知り、政治姿勢を正す鑑戒画としての性格があり、二つの系統が知られています。その一つは南宋の楼璣が紹興初年(1130年代)に皇帝に献上した耕図21場面、織図24場面からなるもので、その後、南宋の梁楷が耕図9場面のダイジェスト版を作り、これが日本に伝わ



絵本通宝志
(部分・静岡県農業試験場蔵)



四季耕作図掛額(部分・中井達夫氏蔵)



四季耕作図屏風（部分・谷田史朗氏蔵）

りました。室町時代から江戸時代にかけて画壇の中心であった狩野派はこの梁楷本やその後も中国から伝わるこの系統の耕織図を粉本として中国風の人物、風俗の中に日本の四季の風情を折込みながら屏風や襖絵を多く描きました。こうした作品にも、将軍や大名などの政治姿勢を正す鑑戒画としての意味がありました。今一つの系統は、清朝四代の康熙帝が宮廷画家の焦秉貞に康熙35年（1696）に描かせた『康熙帝御製耕織図』で、耕図は2場面増えて23図からなり、風俗を清朝風に改め、西洋遠近法を取り入れて描かれています。日本には江戸時代に伝わり、文人画家が粉本として用いました。

四季耕作図の流布は、こうした狩野派を中心とする展開以外にも庶民層への浸透が大きな位置を占めています。江戸中期になると狩野派の独占体制が崩れはじめ、文化の地方や庶民層への普及に伴い、絵は庶民にも身近な存在となり、こうしたなか、和様の耕作図を描くことを目指した町絵師による写実性の高い絵手本が刊行されます。橘守国が享保14年（1729）に刊行した絵手本『絵本通宝志』は屏風、絵馬、浮世絵、工芸品など全国に渡って多くの作品に粉本として利用されました。さらに、米穀を大切に、農への感謝を説くという新たな庶民に対する鑑戒画としての側面も持ち合わせています。また、この時期、自立してきた農民層へ自らの存在価値を確認する手段として、我が国は稲作農業で成り立ち、農は国の基本であることが主張され、その一貫としても耕作図は描かれます。そして、豊作への過程を描き、それを予期させるめでたさをも備えているため、瑞穂の国日本にふさわしい吉祥画として大いに普及していくのです。



農事歳時記絵屏風（部分）

江戸時代の水利問題

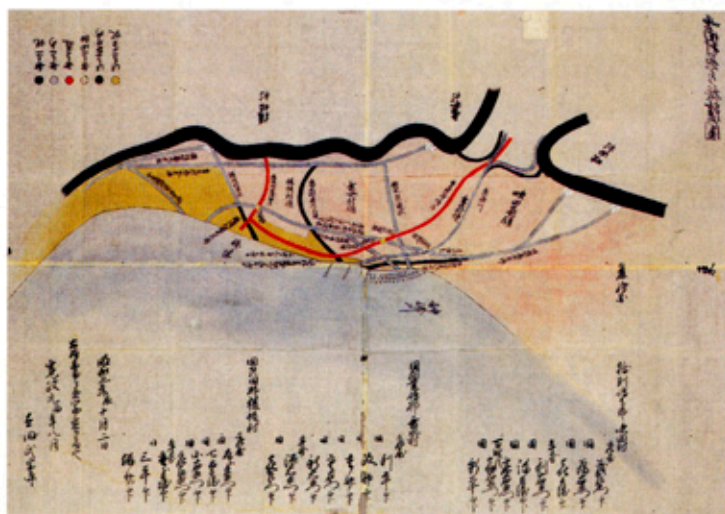
— 悪水処理と村々 —

昨年秋に開催した特別陳列「江戸時代の吹田—古文書と絵図が語るもの—」では、地域に残された古文書や絵図などを中心に紹介し、江戸時代の当地のくらしがどのように営まれていたのか、その一端をみていただきました。展示した古文書や絵図は様々な情報を示唆してくれましたが、やはり水利に関する史料が多いことを再認識させてくれました。それだけ水の利用は生活に密着した問題で、江戸時代の村々では水の利用をめぐる争い(水論)がしばしば起こっていた事実からもうかがい知れます。農業生産に水は欠かすことのできないもので、水が確保できない場合はその村の死活問題となりかねません。また、洪水の時などにいかに水を排水するかという悪水の処理も大きな問題でした。吹田地域では山方の村々では引水にまつわる水論が多く起こり、土地の低い神崎川・安威川筋の村々では悪水処理に関わる水論が多く起こりました。

それではいくつかの史料をもとに、江戸時代の吹田の水利問題、とくに悪水処理のため村々がどのように対処したのかをみていきたいと思います。

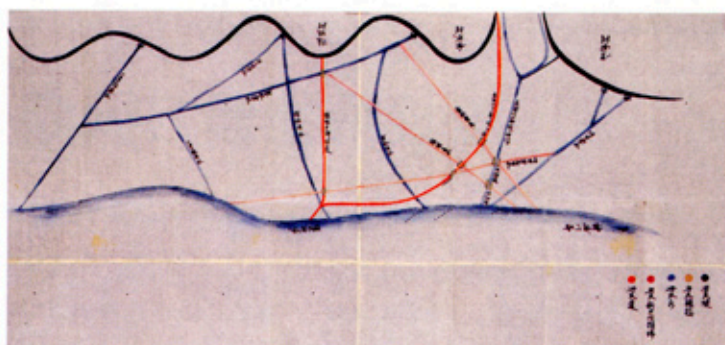
神崎川筋の吹田村・垂水村・榎坂村などでは悪水処理に心を砕いていました。悪水の処理は上流の村々からの悪水抜きをも引受けなければならないのが下流の村々の宿命でした。もちろん悪水井路は一村だけの問題ではなく、他村にまたがる井路であったため、関係する村々の庄屋や村役人たちが立会って水利施設の管理方法を話し合ったり、その普請や

修復の問題に対処しなければなりません。村に残された古文書のなかには、悪水井路に関する話し合いに用いられたと推測できる絵図類などが大切に保管されており、悪水井路の位置関係や井路開削の経緯なども知ることができます。18世紀後半に描かれた「吹田村悪水井路垂水村領榎坂村領絵図」を



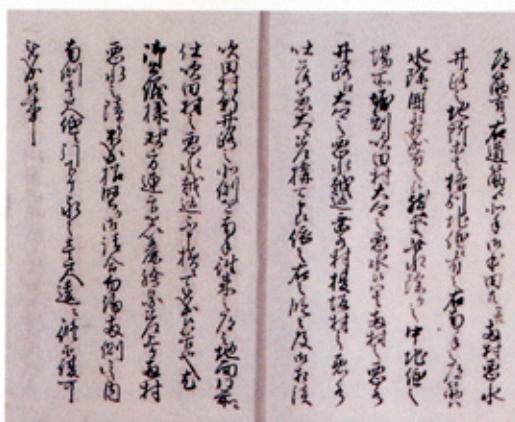
吹田村悪水井路垂水村領榎坂村領絵図 寛政元年(1789)(気比家文書)

みれば、悪水井路と用水の配置がよくわかります。逆流してはいけない悪水井路は神崎川の本流に逆らわないように引かれており、反対に用水は引きしやすいように流路を定めて普請されているのが一目瞭然となります。朱色の道



吹田村悪水井路垂水村領榎坂村領絵図（氣比家文書）

は垂水村と榎坂村から神崎川の榎木渡し場に至る道で、ピンク色で引かれた線が新たに普請を願い出た用水路の位置を表しています。糸田川筋の悪水相論も吹田村と垂水村との間でしばしば起こっています。寛政11年(1799)には、垂水村が字金田の悪水抜樋を吹田村に無断で伏せ替えたことから問題となりました。その後垂水村が伏樋の寸法や修復の条件など、吹田村の条件を受入れることで落着きました。文政11年(1828)には、新樋の寸法など細かく取決めて両村で一札を交わしています。弘化4年(1847)、吹田村を含む神崎川下流の十一か村は大坂町奉行所に歎願書を提出しました。これには悪水井路を猪名川末流まで千間(約1800m)以上延長したい旨が記されて



吹田村悪水井路掘割為取替一札之控
文政11年(1828)(田中家文書)

いました。天保の大浸も排水にはあまり効果はなく、悪水による作物の水腐れは深刻な問題となり、十一か村は悪水井路延長という大共同事業を自普請で行う計画を立てざるをえなかったようです。この計画は実現せず、吹田村のみの井路延長計画が持ち上がりました。村役人および百姓一同で相談してまとめた計画書が、「吹田村井路延一件三方規定書之控」に記されています。結局この計画実現までには10余年の歳月を要しました。

江戸時代の吹田の村々の主要産業はもちろん農業です。その農業の収穫で年貢を収めるわけですから、村人にとって作物の出来不出来に直接関わる水利問題はとても重要な事柄でした。村々が時には争ったり、時には協力したり、水利をめぐるさまざまな問題は、残された地域の史料のなかに散りばめられています。そこには、ひとつの村・ひとりの領主を行政の基本単位とした村請制の枠を越えた村々のつながりと、そこに生活する人々の姿を垣間みることができるのです。

地域博物館と国際貢献

博物館を分類する方法として「中央」と「地域」の区分があり、市内では吹田市立博物館は「地域博物館」、それに対して国立民族学博物館は「中央博物館」の典型です。しかし、海外旅行がブームとなり、衛星放送やインターネットというメディア情報が国境を越えて往来し、グローバル化が進み、中央・地域という狭い区域を限る役割分担は、急速に実態をなくしつつあるようです。その一例として地域博物館である吹田市立博物館の国際貢献のひとつを紹介いたします。

皆さんはJICA（国際協力事業団Japan International Cooperation Agency）という言葉をお聞きになったことがあると思います。主に農業や資源開発、経済振興や医療技術協力などを行う対外援助機関ですが、特殊なものとして「博物館技術研修コース（Museum Management Technology Course）」という博物館運営と文化財保存のための専門家の人材育成も行っています。この研修は1994年度から開始され、毎年8名程度の研修員を海外から招き、現在までに50名の研修員が学びました。

研修は国立民族学博物館が受入れ拠点となり、国立研究機関や地域博物館、大学等が協力して、6ヵ月に及ぶ充実した研修が行われます。ところで市民の皆さまは、吹田市立博物館に通う外国人の姿をみられた方がおられるかもしれません。市立博物館はこの研修の一貫として、「地域の中規模博物館」として一般集団研修を実施するほか、秋には、2週間余りにわたる専門研修を実施しているからです。専門研修の間、研修員は博物館で近代的な設備を学び、資料の展示・収蔵技術、各種資料の取



研修を無事終え、修了証を手に喜ぶ1995年度研修員のカンビさん(左 ラオス)とジュアニスさん(右 マレーシア)

年 度	研修員数	研修員の国名
平成7年度	2名	ラオス・マレーシア
平成8年度	3名	インドネシア・ガーナ・モルディブ
平成9年度	3名	ミャンマー・カメルーン・セネガル
平成10年度	2名	パキスタン
平成11年度	3名	ラオス・ネパール・ザンビア

市立博物館での博物館技術コース専門研修員の国別一覧

り扱い技術、コンピューター処理、資料の劣化対策や^{くんじょう}燻蒸などの虫菌害防除の実務など、博物館運用の理論と実践を体験するのです。市立博物館で専門研修を修了した研修員は、既に13名を数えています。これら研修員は帰国後には博物館の専門業務に着任しますが、各国の博物館体制には大きな差があるため、研修成果を一律に図ることは非常に難しく、将来の研修内容を検討するうえにも、帰国後の研修員の実態を追跡調査する必要がありますがありました。

そのため、平成12年1月29日から2月9日にかけて、JICAによって帰国研修員フォローアップ調査団（団長は森田恒之国立民族学博物館教授、団員5名）が、ラオス人民民主共和国とタイの2国に派遣され、市立博物館からも1名が調査団に参加しました。調査はラオスのビエンチャンとその周辺、タイ北部のナン、中部のカンパエンベック、バンコックなどで行われ、各地の博物館を視察し、そこで帰国研修員を面接して業務の実態や問題点、研修の効果などを調査しました。また、両国の博物館行政にあたる政府高官とも会談をして、各国の博物館のもつ課題を論議し、人材育成のための援助の将来的な見通しを計る重要な調査となりました。

また、調査団は両国で博物館公開セミナーを開催し、

ふたつの講演では130年余りの日本の近代博物館の歩みを踏まえて、次世紀に博物館はどうあるべきかという問題提起が行われ、吹田市立博物館の運営も詳しく紹介されました。講演終了後にパーティがあり、そこでは両国の博物館学芸員が親しく懇談し、国情の差



ラオス政府情報文化省（ビエンチャン市内）



タイ国立カンパエンベック博物館の展示館

を乗り越えてアジアの博物館同志の有益な情報交換と、21世紀に向けての相互協力を誓い合って、調査団は帰国しました。

このように地域博物館である市立博物館も、ささやかな国際貢献をはたしています。ただ、今回訪れた両国の博物館をみると、博物館活動や展示姿勢については学ぶべきものもたくさんありました。し



帰国研修員から博物館活動の説明を受ける調査団
(中央の女性が1995年度研修員のパッチャリンさん タイ・国立カンパエンベック博物館にて)

たがって、21世紀の国際貢献は、片方が一方的に与えるだけではなく、お互いを学習し、相互理解のなかでお互いの求めるものを協力し合う形が必要となってくるでしょう。その意味において、博物館で業務する諸外国の学芸員との実際の論議を通じて、その国の実情を知り、博物館のあるべき姿を知ることが非常に大切だと考えており、この研修は、むしろ吹田市立博物館の運営にとっても、大いに役立つものと思われます。

講演会のご案内

● 5月3日(祝) 午後2時

テーマ 「四季耕作図の広がりとその背景
—近世社会との接点をさぐる—」
講 師 神奈川大学経済学部教授 河野通明氏

● 5月28日(日) 午後2時

テーマ 「四季耕作図と民具」
講 師 花園大学文学部教授 芳井敬郎氏

各講演会とも会場は吹田市立博物館2階講座室。
聴講は無料で先着順(120名)、開場は午後1時30分です。

吹田市立博物館だより 第14号

平成12年3月25日発行

吹田市立博物館

☎564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号

TEL.(06)6338-5500 FAX.(06)6338-9886

■ 交通案内

J R 岸辺駅下車徒歩20分

J R 吹田駅・阪急吹田駅から桃山台駅前ゆき、山田桜切
山ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分
千里中央ゆき、阪急山田ゆきバス「岸部」
下車徒歩10分

阪急南千里駅からJ R 吹田ゆきバス②、③系統「佐井寺北」
下車徒歩10分



©70 古地図を70%再生紙を利用して印刷